

〔論説〕

満族伝統法文化における宗教の役割について

赫 然*

李 暢 訳**

中国の歴史上において、満族は非常に特殊な地位を占めている。満族の先人たちが打ち立てた政権が二度にわたって中原地区を統治していて、しかも統一した清朝政府を樹立した。目下、中国では少数民族の法文化についての研究は盛んに行われているが、満族の法文化に関する研究は未だに珍しい存在だった。そこで、我々は宗教と法の関係を手がかりに、満族の伝統宗教による満族の伝統法文化への影響について探りを入れたいと思う。

一、宗教と法文化の関係

我々は法律制度の源を探るときに、宗教の影が多少見え隠れしている。宗教における権利、義務、分配、組織秩序、禁忌などの規定は、法の誕生に啓蒙的な役割を發揮していた。現代社会においても、殆どの国では宗教と法律はすでに決別していたが、しかし、二者の関係は未だに密接していることは否めない。「宗教の予言的と神秘的の面と法律の組織的と合理的の面とは、まさに矛盾している。が、それらは互いに依存し、作用している。どんな法律制度も宗教とある種の要素を共有し、例えば、儀式、伝統、権威と普遍性など、人々はそれを頼りに法律感情を育てていく。もしそうでなければ、法律は死んだ教条に過ぎない。同様に、どんな宗教でも法律の要素を持っていて、そうでなければ、個人の狂信に退化していくだろう¹⁾。」

(一) 宗教と法文化の概念

Religion という単語はラテン語から由来し、最初の意味は「恐れる」だった。西洋宗教学の基礎を作ったエドワード・テラーによれば、宗教は魂の存在に対する信仰である。その後の発展に伴い、Religionの意味合いも幾つかの変化を生じていた。例えば、神と祖先の魂に対する尊敬、崇拜と束縛、及び神と人間の間に存在するある種の契約であった。宗教の外在的表現だった巫術、禁忌、教義、儀式、懺悔から、我々はその内在的本質を見えるはず、即ち、規範化、形式化、機構化と制度化した一連の宗教現象は社会に対する秩序のある規制である。

編集部注* 長春理工大学法学院長、教授、法学博士

** 長春理工大学法学院講師、法学博士 本稿は2010年5月17日に開催された法学研究所第41回現代法セミナーの報告原稿を翻訳したものである。

1) ハロルド・J・バーマン、梁治平 訳「法律と宗教」中国政法大学出版社2003年、65頁。

文化的角度から見ると、如何なる宗教伝統は必ず人生と社会においてその意義と価値を表し、そして生き生きとした文化形態に根を下ろしている。そういう意味では、宗教と文化は別々に見ることができない。ここで、文化的視角から宗教を定義してみたい。即ち、宗教は人間の自身環境以外に存在し、神と人間の祖先の魂に対する尊敬と崇拜の社会意識で、秩序のある社会規制に形成した文化体系である。この定義は宗教と文化の密接関係を揭示し、宗教という社会文化における人間の主体地位を明確し、文化のレベルにおける宗教の本質意味合いを反映した。

「法文化」という概念は如何だろう。未だに普遍的な認識に達していない。アメリカの法学者は、法文化が法と法律制度に対する人々の態度、信仰、評価と期待だと定義した²⁾。旧ソ連の法学者は、法文化をある種の特殊な精神財産、社会的精神文明として理解し、即ち法文化は法律制度、法律施設、法律運行と法律意識がある程度の状態に達していたことを指していた³⁾。日本の法学者は法文化を法律意識を核心とする、法律制度と法律施設を含む社会文化現象として理解していた⁴⁾。

中国国内でも、法文化に対する理解は数十種類に上っている。広い意味での法文化は人類社会における法に関するすべての成果を指している。狭い意味での法文化は人々が後天的に得た法と法律施設に関する観念と(知識、信念、判断、態度などを含む)価値体系である⁵⁾。そこで、我々の法文化についての定義を述べてみよう。法文化とは、ある団体が長い共同生活と交流のなかで形成した法と法律現象に関連する考え意識と、そこから生まれる外在の表現形態であり、法律現象が存在する内在的価値選択基礎で、国家法と慣習法が上手く機能するある種の文化形態である。

(二) 宗教と法文化の関係

1、法文化形成における宗教の指導性

エミール・デュルケームによれば、すべての重大な社会制度は宗教から起源すると言えよう⁶⁾。人類社会の発展過程において、宗教は社会を長らく支配する精神的力であったし、法律の発展過程と宗教の関係ももっと密接的であった。その例として、イスラム法系は政教一体の法モデルで、宗教法は最高権威を持つ法律で、唯一の法律とまで言われている。宗教は社会秩序を調整する手段として、その誕生時間は明らかに法律制度が社会秩序を調整する時間より早かった。宗教の影響力が大きかった部落では、法律の合理性と正当性は宗教のペールを被り、神の権威に訴えることによって、部落中の支持を集めた。宗教の教義、儀式、禁忌と崇拜は、少数民族法文化の形成過程において法律規範の役割を發揮した。また、後に分離された法律規則にも指導的意義を發揮していた。即ち、宗教の指導的役割は少数民族の法文化形成において、もっと明らかであった。

2) ヘンリー・エルマン、賀衛方、高鴻均 訳「比較法律文化」清華大学出版社2002年、8頁。

3) アレクセーエフ、黄良平、丁文琪 訳「法の一般理論」法律出版社1986年、13頁。

4) 何勤華「日本法律文化研究の歴史と現状」中外法学1989年5期、23頁。

5) 江必新「法文化の構築と法制教育工程」中国人民公安大学出版社1999年、3頁。

6) エミール・デュルケーム、渠東、汲喆 訳「宗教生活の基本形式」上海人民出版社1999年、522頁。

2、宗教教義と法文化の価値同一性

宗教は単に法文化の形成に指導的役割を持っているだけでなく、一国と一民族の法文化内容も宗教教義の影響を深く受けていて、即ち価値の同一性を持っている。例えば、満族は信仰しているシャーマン教について、その主な教義は神の面前でみんな平等、万物が魂のある存在であった。北方にある人類氏族社会から生まれた原始宗教として、人類が世界を認識し、自然を改造する基礎の上で形成した。その核心たる価値観はある種の平等な助け合いであった。このような価値観は法律の前でみんなが平等だという法治思想に内心の認可基礎を与え、人々がそれを受け入れ易くした。

3、宗教儀式と法文化の外在的形式の整合性

儀式とは、象徴的、パフォーマンス的、文化伝統により決められた行動方式だと言われて、よく特定団体或いは特定文化の中で、交流、連携、秩序強化と社会整合の方式と解釈される。法文化の外在的表現形式の突出した特徴の一つも儀式や符号の重要な役割を強調している。源流や主旨のいずれも宗教の儀式と整合性を持っている。西洋における正義の女神、中国古代の獬豸（カイチ）など、いずれ宗教に原生し法律の象徴符号になっていた。法律はこれらの宗教ものを利用して法律の寓意を例えた。悠久たる歴史的宗教儀式と法律儀式は、いずれも宗教生活と法律生活が共同作用した結果であった。「法律における各種の儀式（立法、法律施行、調節及び裁判の儀式）も、宗教の儀式と同じく劇化した荘嚴たる価値体験であった。」⁷⁾

二、満族の宗教信仰の源を辿る

満族の先人たちはほかの民族と同様に、原始部落からもっと高級な社会へ発展して来た。地理環境と生態環境の影響で、満族の先人たちは主に採集、狩り、漁りなどの森林生活方式を取っていた。こうした生活方式から生まれた宗教信仰体系は農耕民族と違っていた。「満族は長い進化と発展する過程において、一連の宗教信仰体系を徐々に形成し、それによって集団的文化認可を打ちたてた。即ち集団への凝集力を形成した。」⁸⁾

(一) 満族人のシャーマン教信仰

史料と遺跡発掘の結果によって、我々は満族人の先人たちがシャーマン教を信仰していたことが分かる⁹⁾。「シャーマン」という言葉はツングース語で、その意味は「極端に不安定、激動と狂う人」¹⁰⁾という説だったが、民族言語資料とフィールドリサーチによって、「シャーマン」の意味を「分かる、知る、理解する」だと分かった。満族の史詩だった「烏布西奔媽媽」の中でも、「知る」と解釈され、「最も神の意思に通じて、神の意思を知る人」という意味であった。シャーマン

7) ハロルド・J・バーマン、梁治平 訳「法律と宗教」中国政法大学出版社2003年、22頁。

8) 江帆「満族生態と民俗文化」中国社会科学出版社2006年、128頁。

9) 陳捷先「清入関以前の満族の宗教信仰」台湾大学歴史学報1992年、17号。

10) 呂光天「北方民族原始社会形態研究」寧夏人民出版社1981年、208頁。

の地位は高く、「烏車姑烏勒本」というシャーマン教の神話を語る。そして、祭祀のときに主役を演じ、満族の日常生活でも、大事なときにシャーマンによって神の指示を乞うようになっていた。

シャーマン教は原始社会の人々による魂に対する認識から起源する原始宗教である。シャーマン教は宗教ではなく巫術だという考えを持つ学者も居るが¹¹⁾、果たしてそうであろうか？「世界に幾多の宗教があれば、幾多の宗教判断がある。」¹²⁾ 宗教を判断する四つの要素は、観念、体験、行為と体制である¹³⁾。いずれの宗教もこの四つの要素を含んでいる。シャーマン教もその例外ではない。シャーマン教の基本的な宗教観は「万物とも魂あり」である。これもすべての原始宗教にある基本信仰理念であった。シャーマン教の主な崇拜形式は自然崇拜、トーテム崇拜と祖先崇拜の三つだった。そして、供養する神霊もそれに応じて、自然神霊、動物神霊と英雄祖先神霊の三つであった。これも宗教体験方式の一種である。シャーマン教の「神おろし」及び祭祀物が外在的宗教行為を反映している。「烏布西奔ママ」、「天宮大戦」、「尼山シャーマン」といったシャーマン教の伝説からも、神諭が見られる。満族人の禁忌思想もシャーマン信仰から生まれて、祭祀の前に行う準備活動も複雑に極まった。現在、世界の多くの地域では多神信仰の原始宗教であるシャーマン教はすでに消えて行ったが、中国東北地区に居住する満族人のなかでは未だに信仰し続けていた。とくに、満族居住区にある村落での影響が強く、シャーマンがすでに宗教制度として成立することを示している。

(二) 満族人の仏教信仰

満族は山海関を破って中原地区を統治するようになってから、仏教信仰が盛んになっていた。元々、満族人の伝統居住地域では、仏教思想の影響もあったが、シャーマン教の影響力は圧倒的だった。それは満族の伝統的生産方式と密接な関係があつて、しかし、シャーマン教もまた仏教の影響を受けて、変化する兆しが見えていた。例えば、満族人が供養する神棚には、シャーマンと仏の特徴を同時に備えていた。

当時、満族の統治者は賢かったといえよう。自分民族の宗教信仰であるシャーマン教を尊重しながら、ほかの民族の信仰習慣も尊重していた。さらに、明時代以降の満族南遷に伴って、中原文化の中心部に近づくことによって、仏教の影響も直接的に受けるようになった。明正統13年(西暦1448年)の記録によると、建州左衛部督董山、凡察など朝廷への貢ぎ物の中に、「仏像」が入っていた¹⁴⁾。別の記録では、満族の首領であるヌルハチの菩提寺に石の塔があり、その礎石は近くに住む包衣(奴隷)に盗まれて壊した。ヌルハチに上奏し大臣に命じてその礎石を探させた。後に、礎石を盗んだ包衣を捕まえて、「杖五十」の刑を処した。菩提寺の僧侶も監督不行き届きの

11) 楊朴「シャーマン教の本質は巫術で宗教ではない」吉林師範大学学报、2005年1号。

12) ミュラー、金沢 訳「宗教の起源と発展」、上海人民出版社1989年、13頁。

13) 呂大吉「宗教学綱要」高等教育出版社2003年、35頁。

14) 「明英宗實録」173巻、12頁。

罪で収監し、塔の礎石を修復したのち釈放した¹⁵⁾。この記録から分かるように、ヌルハチは仏教のお寺を重視し、満族の統治者たちが仏教に対する尊重の意思が伺わせる。

三、満族伝統法文化における宗教の役割について

例え、もっとも権利と義務に固執する法律でも、人類の内在的精神生活にも関心を持つ同様、もっとも神秘的な色合いを持つ宗教教義でも、社会秩序と社会正義に関心を持っている。「如何なる宗教も法律的な要素を持っているはず、もっとはっきり言えば、二つの法律要素を持っている、一つはある特定の宗教を信仰する団体の社会秩序に関連し、もう一つは宗教団体がその一部であるもっと大きな団体の社会秩序に関連する。」¹⁶⁾ 満族の発展歴史と関連資料から見ると、満族の伝統法文化におけるシャーマン教の果たした役割は比較的に大きく、仏教の影響はそれほどではなかった。そこで、宗教による満族伝統法文化への影響を語る場合は、役割の大きかったシャーマン教だけを研究対象とする。

(一) 満族伝統法文化に対する宗教の正当性解釈

「グデハン、ハハジ、タンジゲソンレレ——グデハンの小僧よ、お前はよく聞け！われはネネの神フロンタンジュジママ、タジウリ星神のお諭しによってお前に忠告する。——グデハンは跪き、泣き始める。一族の人たちは皆泣きながら、神のお諭しを聞き入る。烏布西奔は皮の太鼓を敲き、グデハンに火の壇上に入るよう命じ、グデハンは神に憑かれたように、恐怖せず、「皆の神や、ご先祖や、われの忠誠心を見よ」と歌いながら、前へ進んだ。——われは神だ、是非を分かり、公平を分かり、一寸たる間違いもせずに、ウレレ——烏布西奔は手話を使い、使いの女シャーマンたちは大きい声で神のお諭しを伝えた「烏布西奔のシャーマンはもう神にお尋ねした、グデハンは満族のすばらしい子孫だ。」一族の人たちはみな「よい！」と答えた。」¹⁷⁾

上記の内容は満族の語り部¹⁸⁾である「烏布西奔媽媽」にある「グデハンの審判」に関する記載である。その審判過程から、満族の宗教法文化に関する特徴を、例えば、神諭、神霊の権威に訴え、神霊に通ずるシャーマン、一族の敬虔等等、見えてくる。それらは内心感情の承諾であり、形而上的なものではなかった。宗教の起源は正式な法律制度よりも古く、宗教思想は一旦人の意識に入り、そして人に無意識なうちに遵守されると、人間は宗教の奴隷となり、宗教は社会のリモコンと人の道しるべとなっていく。宗教は最も有効的な調整手段となってしまう。

15) 「満文老檔」中華書局1990年、19頁。

16) ハロルド・J・バーマン、梁治平 訳「法律と宗教」中国政法大学出版社2003年、97頁。

17) 魯連坤 語り、富育光 注釈「烏布西奔媽媽」、吉林人民出版社2007年、62頁。

18) 満族の語り部とは、長年伝承されてきた、独特な表現の色合いを持つもので、満族伝統社会におけるイデオロギーの反映であり、そして、このイデオロギーの最も主要に反映されたのは、シャーマン教の神諭だった。本来、語り部は文字記載がなく、シャーマン教では文字を使うことで神諭に対する不敬だと信じた。よって、伝承方式は先代のシャーマンが口伝えの方式で傑出した弟子に教え、のちこの弟子は継ぎのシャーマンとなる。

シャーマン教における神の数は数え切れないほどある。シャーマンによる神諭を請う前に、「排神」(神を並べる)という儀式があり、その仕来りは「七星斗の前に跪いて祈祷し、神霊を逐一お招きする」¹⁹⁾ というものだった。儀式の進行中に、シャーマンは一族が信仰するすべての神さまを暗唱せねばならない。その数は約二、三百名にあがるそうだ。こんなに多くの神を信仰することは、ほかの宗教では見られない。神霊の多さは理性の思想を占拠し、「万物有霊」の宗教観から生まれた考え方は、「霊」ですべての出来事を解釈し、「霊」で自己行為を規範し、「霊」で災難の合理化解釈を求めるようになった。法文化も自然的に宗教解釈の範疇に入れられ、濃厚な宗教的色合いに帯びていた。「満族の各部族は重大事件或いは偶発事件に出会ったとき、殆どシャーマンによる神諭を請うことで行動を決めていた。即ち、神の意思の結果で部族の事務を行った。」²⁰⁾ 神の意思は最高裁判者としてのことで、シャーマン判決の合理性を解釈する根源であった。

シャーマン教は満族伝統法文化の中で座標のような役割を果たして、満族伝統法文化の発展方向を決めていた。その座標を設計したのはシャーマンであった。「部族の間に争いごとがあり、復讐か戦争か、互いに譲らず、シャーマンの占いによって判断を下した。ほかの部族より身を寄せてくる人が居れば、信じるか信じないか、留めるか留めないか、水、火、野獣(との格闘)などによって決める。ほかに、漁り、農耕生産、一族の財産、婚姻、葬式などの生活の面々まで、シャーマンによって決められる。」²¹⁾ 結局のところ、部族の人たちはシャーマンの力が自分たちに利益を持たされると確信したことで、その権威の源であったと言えよう。

(二) 満族伝統法文化に対する宗教の価値浸透

満族は一つの部族として、共同体としてなり行く共通する価値基礎が必ずある。この価値基礎は秩序のある社会進化の前提となっていた。そして、社会はある程度の発展を遂げたとき、この価値基礎は外在化し、実体のある価値形態となっていく。満族の歴史を考察してみると、この種の実体価値の表現形式は実に富んでいた。例えば、イエロリのお面²²⁾、鷹神姫²³⁾、媽媽袋²⁴⁾、子孫繩、佛托媽媽²⁵⁾、柳葉²⁶⁾などがある。満族の伝統法文化も必然的にこのような考え方と、神諭と、神本子²⁷⁾ と、宗教精神などの影響を受けていた。その結果、満族伝統の法文化理念は宗教の価値観念に浸透され、一族の人たちは自発的な行動によって宗教化された法文化の価値を実現していた。

19) 宋和平 注釈「シャーマン神歌注釈」、社会科学文献出版社1993年、43頁。

20) 富育光「満族シャーマン教研究」北京大学出版社1992年、97頁。

21) 江帆「満族生態と民俗文化」、中国社会科学出版社2006年、155頁。

22) イェロリとは、シャーマン神話にある悪い神、神諭を請うときそのお面を被る。

23) 鷹神姫とは、鷹頭人身の女シャーマンである。世における最初の女シャーマンで、シャーマン職業化の象徴である。

24) 媽媽袋とは、ご先祖の位牌のそばに吊る黄色い袋である。中に、十数メートル長さの糸が入られ、「子孫繩」という。

25) 佛托媽媽とは、生育の女神である。

26) 柳葉とは、人間は柳葉の中で生まれたという満族の神話から由来するシャーマン信仰である。

27) 神本子とは、民間でシャーマン教のことを記録する写本のことを言う。

1、満族宗教におけるプロセス価値

如何なる宗教も一定の形式で自分の信仰を表現している。シャーマン教も例外ではない。「請神」(神に供物を供える)、「降神」(太鼓を叩いて神を呼ぶ)、「領神」(神に憑かれたシャーマンは神の代わりに神諭を述べる)、「送神」(神を送り返す)といった段階に分けて、それぞれ違った儀式がある。満族にとって最も重要な儀式である「大祭」を例にとってみると、シャーマンは「神衣」と「神帽」を被り、腰に「銅鈴」をつけ、手に「神鼓」を持ち、その場面は雄大かつ熱烈であった。「大祭」儀式そのものは複雑極まり、最短で三日間、長いときは五日以上がかかり、またの名は「五日祭」とも言う。その流れは、一日目が先祖の位牌を請い、二日目が小麦粉を磨き、三日目が「大祭」の当日、四日目が願ほどき、五日目が祈り福であった。「大祭」儀式はすべて決めた流れに沿って行われて、そして満族先住民の行動モデルを大きく影響した。ほかの民族と比べると、満族は比較的厳しい地に生存しているため、伝統の行事プロセスに沿わないと、その生存環境で生きていけなくなる。原始的な狩猟組織であった「牛録」であれ、後に発展した「八旗制度」であれ、いずれ満族はプロセスを重視する習慣の現われであり、その宗教信仰との関係が密接だったことである。

2、満族宗教における公平価値

満族集落のなかで、同じ「烏克孫」(血縁関係のある組織形式)に属する人たちは、居住地も近くて、互いの関係も緊密だった。彼らは通婚できず、共同の先祖である「ウジェク」を祭る。困難に接するとき、神に誓いを述べ、一致団結で接する。ほかの部族と衝突が起こったとき、血の繋がった同族の人たちは集まり、共に守りあった²⁸⁾。そうした記録から分かるように、満族人は濃厚たる血親観念を持っている。共同で自分たちの守り神を崇拜し、神は一族の精神支持となっていた。神のみが一族の人たちより尊い、すべての人は血親関係に基づいて平等な地位にある。労働成果の分配でも、一族はすべての成果を平等で分配する。満族の日常生活において、これは既に習慣となっている。当初、ヌルハチは「旗制」を創ったとき、息子や甥の合計八人に八の旗の「旗主」と命じた、歴史上「八家」と呼ばれた。「八家」は政治権力の平等がもちろん、経済面での平等も要求した。満族の社会交流でも公平思想を提唱した。公平思想は民族内部の矛盾を緩やかにし、民族の凝集力を強めた。例えば、罪を犯した族人に「神判」にかけてその罪を証明した。こうしたやり方は目に見える正義と認識され、プロセスでの公平を実現することによって、一族の人たちに受け入れさせた。

3、満族宗教における義務性特徴

宗教の特徴の一つは服従を強調することである。自分が信仰する神に僅かな懷疑も許されていない。疑う念があれば職権者の訓戒を受けなければならない。シャーマン教は原生宗教に属し、最初の信仰と崇拜の対象はまだ固まっていなかった。ある現象と事項が信仰と崇拜できる程度に達したとき、初めてシャーマン教の信仰対象になれる。シャーマン教は信仰する神々の数が多くて、動態的な発展過程を呈している。一般的に言えば、人々は信仰する神の数が多ければ信仰の

28)「満州実録」1巻、台北華文書局1969年、24頁。

対象も豊富になり、神の影響力が大きくなり、服従意識も固くなる。また、集団文化の心理認可によって、シャーマンは尊重の対象となり絶対の指揮権を持つようになる。厳密な宗教儀式は濃厚な信仰雰囲気を作り出し、一族の思想そのものを宗教に禁錮した。シャーマン教の中に禁忌思想がたくさん含まれている。例えば、犬がヌルハチを救った伝説から生まれた「犬を殺さない禁忌」、居間の西方向に先祖を供養する「先祖位牌」が祭られているから生まれた「西方向に座らない禁忌」などがある。宗教の禁忌思想は神秘的な力と神聖な対象を利用して、人々に震撼させ服従させている。それは社会規則の管理規制であり、必ずやるべき義務規制であり、社会全体が秩序に乗って運行する基礎である。

4、満族宗教における開放性特徴

満族人は開拓と詮索の精神に富んでいる。それは満族人の生存環境に関係し、地理環境は満族人の民族性格を創り上げている。満族の先人たちは「白山黒水」と言われる中国東北部に生息している。北に寒いシベリア地区があり、東に果てしない大海原、西にモンゴル高原、南に原始森林がある。こうした閉鎖された環境の中で生存していくには、満族の人たちは勇猛尚武、豪放剛毅、自由崇拜、開拓包容といった民族性格を形成した。満族の伝統語り部である「烏布西奔媽媽」のなかに、烏布西奔という偉大なシャーマンは太陽を追うため五回にもわたって航海し、一切の困難も恐れず、ベーリング海峡の南端まで達した。最後、烏布西奔は急病で海上にて死去、太陽を追う旅に幕を閉じたという記載があった²⁹⁾。こういう記載から分かるように、当時の満族人は生活環境に固持せず、すでにほかの民族との交流を盛んに行っていた。これは漢民族の農耕経済、重農抑商の農業文明とまったく反対的であった。こういう流動的な民族理念は武力を推賞し、戦争に上手な民族性格を養成して、満族の法文化形成に深く影響していた。

四、むすび

とにかく、伝統的な満族社会においては、法文化に対して宗教の影響は様々な面で現れている。たくさんの宗教教義がすでに満族慣習法となっていた。今日では、こうした要素がすでに著しくなくなっていたが、満族法文化に対する宗教の影響は未だに感じられて、そしてこれからも代々継げられていくだろう。

29) 魯連坤 語り、富育光 注釈「烏布西奔媽媽」、吉林人民出版社2007年、137頁。